

関島寿子・小川待子・留守玲 三人展 を見て

本間一恵

金沢のホテルで、KOUGEI Art Fair Kanazawa2021 が開催され、「中長小西」が上記の3人展(草木、陶、鉄の現代工芸)で参加する、と知ったのは、2021年11月。ホテルと聞いて、ロビーや宴会場のようなところに参加ギャラリーが並ぶのかと思ったが、どうやら客室を使つてのユニークなアートフェアだったようだ。(2021.11.26-28 ハイアットセントリック金沢 5-6F)

会場を訪れた関島寿子からその後来たメールには、「異素材ながら、飾り気のない形や、技術の核に絞ったアプローチが共通しているのが並べてみるとよくわかりました。」とあり、行けずに残念と思ったところへ、幸いにも銀座で見られる、という知らせが続いていた。

「想いを紡ぐ:三人の発露 - 関島寿子・小川待子・留守玲」 - 期間は年末年始を挟んで、2021.12.11-25 & 2022.1.11-22

会場の場所は検索してわかったが、中長小西は初めて聞く名前前で、ギャラリーともうたっていないので、どんなところなのかと少し恐る恐る入ってみる。狭い入り口から、ガラス越しに一つ目のバスケットリー作品が出迎えた。球形に近い立体だったと思うが、照明がうまく内部に入り込んでいたせいだろう、視線は表面ではなく、細かい空間を巻き込みながら部材が交錯する内部に吸い寄せられた。いつもなら、素材が何か気がなるはずだが、あとから言われて、黒竹が入っていたのに初めて気付いたくらいである。小川待子の作品に最初に出会った時のことを思い出す。どんな作品だったか覚えていないのに、同じようにそれが抱えている何かに強く惹きつけられたのが忘れられない。何十年前のサントリー美術館の展示ケースの中だった、と思う。

小川待子という作家を詳しく知ったのはそのあとだったかもしれない。はっきりしているのは、1987年だ。当時関島寿子のバスケットリークラスに在籍していた仲間10人ほどで、自主学習会という企画をした年である。今、記録集を見ると、なんと豪華なゲスト達を迎えていたのかと驚くのだが、その中のひとつが小川さんのスライドレクチャーだった。はじめて訪れたアフリカで、適応するまでにイニシエーションの期間を経験したことや、作品に「割る」という行為を取り入れたきっかけとその後の試行錯誤な

ど、今読みなおしてみても面白い記録集になっている。

話が横にそれてしまったが、ギャラリーの中へ進もう。小川の大作が出迎える。溶けたガラス質のポリュームのある立体は、強烈な熱とその冷却で一時固定された状態を想起させる。もちろん、作家が最適ところで静止させた形だが、時間を巻き戻して、また柔らかくしてちよつとだけ動かしてみたいような気がしてしまう。地面から掘り出して姿を現したような赤い土の作品は、どこの大地だろうかと思わせる。

関島の作品は、植物という手になじんで変化させやすい素材だが、どれも最終的にピタッと収まってゆるぎない存在感を示している。ギャラリーで用意した参照用リーフレットには、ひとつひとつの作品についてのコメントがつけられていた。素材や技法、作者の考えていたことなどが提供されると、作品の見方も変化する。また、それを媒介してコミュニケーションが活発になり、別の楽しみが増える。バスケットリーは、植物という身近な素材と誰でも理解しやすい手の動きを手段としているから、簡単な説明でも興味を持ってもらえることが多い。関島自身こうした説明を加えることを重視しているので、その教えを受けた我々のバスケットリー展でも作品解説を実施してきた。ただ、それを不要と感じる人がいるのも確かだ。特にテキスタイルがアートとして認識されていく過程で、批判的な反応を受けたことを覚えている。確かに知りたくない時もあるし、白紙状態での対峙も代えがたい。しかし、はじめに出会ったときの新鮮な感動と、あらためていろいろ考える楽しみとは両立するはずだ。

留守玲の作品を初めて見たのは、野外での大作だった。それからだいぶ経って、今度はギャラリーで繊細な小品たちと出会う。その両端の作品がここでは一緒に見る事ができた。そして今回、制作工程の一端を知った。どうやら細かいピースをたくさん作って、それを再びひとつひとつ溶接で繋げている部分が多いようだ。たとえばシンプルで印象的な小品の線状部分も、よく見ると、叩きのばしたり、削り取ったりしてできた線ではなく、粒粒が集積している。以前、見ただけですぐに魅力的な線だと嬉しくなったのだが、出来てくる過程を知ると見方も深まる。バスケットリーで素材を細く裂いたり叩いたりしてから、それをまた新たに構築していく過程を連想したりした。

この三人は中長小西のセレクトだった。展示会の案内には「精力的な制作姿勢三人の微塵もぶれることのない精力的な制作姿勢を長年の作品を通して見ることによって、より明確にすると同時に、素材も表現方法も全く違う三者の作品を同じ空

間に展示することにより、各々の特質がより際立ちまた共鳴する何かが見えるのではないか。何より私自身がそれを見てみたいという強い衝動に駆られ本展を企画致しました。」とある。

この三人が、実はすでに交流がある間柄だったというのは、企画した後で知ったらしい。たしかに素材も表現方法も違うが、同じ時代にいる作家同士、引き合っけあうものが以前からあったのだろう。草木を編む、土を焼く、鉄を形作る。自然の中から素材を引きだして、作品にする。制作過程に単に技術的なアプローチではないものを積み重ねていく。その作品が同居する空間に居心地の良さを感じるのは当然かもしれない。

古くは籠や土器に始まった人間の手作業。鉄器が登場するのは少し後。そういえば3人の中で留守さんはちょっと若かったな、と関係のないことをつぶやいていた。

